The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	カミーニャの『国王宛て書簡』とそのブラジル先住民像
Author(s)	東, 明彦
Citation	ブラジル研究. 2006, 1, p. 1-27
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/98377
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

カミーニャの『国王宛て書簡』と
そのブラジル先住民像

東　明彦

はじめに

1499年ヴァスコ・ダ・ガマがインドへの航海から帰国すると、ポルトガル国王マヌエル1世は第2次艦隊をインドへ派遣する準備を急いだ。ガマ艦隊が収集したインド洋の季節風（モンスーン）についての情報にもとづき、第2次艦隊の出発は3月と決まり、航海・航路についても詳細な指示が与えられた。第2次艦隊も、ガマの艦隊と同様に、南大西洋の南東貿易風、およびベンゲラ海流、赤道海流を避け、赤道付近でアフリカ大陸から大きく西に離れ南下し、その後偏西風にのり一気に喜望峰へといたる航路を辿ることになっていた。[1]

第2次インド艦隊は、航海者・船員のほか、軍人、商人、聖職者を含む約1500人が大型帆船ナウ船10隻と機動力に優れたカラヴェラ船3隻に分乗する大艦隊であった。[2]艦隊の司令長官には、貴族の家系に属する、ベイラ地方ベルモンテ生まれで当時32ないし33歳であったペドロ・アルヴァレス・デ・ゴウヴェイア（カブラル）が任命された。

艦隊は1500年3月9日、リスボンを出港し、13日目には、カナリア諸島を経由し、西アフリカのカボ・ヴェルデ諸島に到達した。(その付近でヴァスコ・デ・アタイデが指揮するナウ船が消息を絶った。) その後、赤道付近の凪を克服し、南東貿易風を回避するために西に大きく迂回を始めた。

4月21日、船員が「ボテリョ［ひばまた属の海草］と呼んでいる丈の長い大量の海草」と「ラボ・ダズノ［ラボ・デ・アズノ「驢馬の尾」］と呼んでいる海草」[3]を見つけた。これは、陸が近いことを示す兆候と考えられた。

そしてついに、4月22日夕刻、遠くの陸地が目に入った。つまり、まず最初に「丸い形をしたたいへん高い山」が、つづいて「その山の南にそれより低い丘」が、そして最後に「木が生い茂っている平らな陸」が望見されたのである。カブラルは、その高い山を「モンテ・パスコアル（復活祭の山)」、そしてその地を「ヴェラ・クルス（真の十字架）の地」と命名した。[4]

翌4月23日、午前10時頃、海岸に接近した艦船の乗組員は、浜辺にいる7、8人ほどの男たちの姿を目撃した。これがポルトガル人とブラジル先住民[5]との初めての出会いであった。[6]

カブラルの艦隊は、こうして「ヴェラ・クルスの地」に5月2日までおよそ10日間あまり滞在し、その間現地の先住民と接触し、現地の情報を入手しようと試みた。このときの様子は、艦隊に随行していたペロ・ヴァス・デ・カミーニャ(1450?-1500)が国王マヌエル1世に宛てた書簡[7]によってかなり克明に知ることができる。

本稿は、「ブラジルの出生証明書」[8]と称されるカミーニャの書簡を考察し、とくに先住民に関する記述に注目し、彼の先住

民像を探ることを目的としている。そこでまず第1章では、カミーニャの書簡に対する評価とその来歴、さらにカミーニャの人物像について述べ、第2章では、カミーニャの書簡に描かれたブラジル先住民の特徴を論じることにする。

第1章　カミーニャの『国王宛て書簡』

(1) 書簡の評価

カミーニャの書簡は、カブラルの艦隊に参加したペロ・ヴァス・デ・カミーニャが1500年5月1日付けでブラジル北東部のポルトセグロから国王マヌエル1世に送ったブラジル「発見」を報告する書簡である。

この書簡について、ブラジル史学史に大きな業績を残したジョゼ・オノリオ・ロドリゲスは「カミーニャの国王宛て書簡は、ブラジルの、そしてブラジルに関するクロニカ自体の公式な出生証明書であり、ブラジルの偉大さを広めるのに情熱をそそいだ一群のクロニスタの活動の始まりを告げるものである。」[9]と述べ、カミーニャの書簡には「物事を美しくしたり醜くしたりせず、客観的かつ正確に、真実だけを語ろうという姿勢」[10]があると評価している。

ジョゼ・マヌエル・ガルシアも、カミーニャの書簡研究で「最良で最も重要な作品」とみなされるジャイメ・コルテザンの著作[11]への序文で、「(15世紀から17世紀までの海外進出に関する数多くのポルトガル語文献の中で、ペロ・ヴァス・デ・カミーニャが著したマヌエル1世宛て書簡は)、最高の位置を占めている」[12]と述べている。

このようにカミーニャの書簡は、ポルトガルの大航海時代の史料として重要な位置を占めているが、カブラルの航海、とり

わけいわゆる「ブラジル発見」に関する史料としては、最も重要な史料である。カブラル艦隊の航海に関する史料は、その数がきわめて少なく、現在までに知られているのは、ジョアキン・ロメーロ・マガリャンイス他編『ペドロ・アルヴァレス・カブラルの艦隊に関する14の史料』[13]に所収の14の史料にすぎず、しかもその大部分は国王のカブラルへの指令等を記載した断片的なものである。[14]

上記14の史料中、ブラジル「発見」時の出来事にわずかにせよ言及しているのは、「メストレ・ジョアン[15]の国王ドン・マヌエル宛て書簡」だけである。しかも、その内容は、1500年4月27日月曜日に南中時の太陽高度を計測するため上陸したという事実が中心である。(ちなみに、その時の計測では、同地は、南緯17度とされたが、これは実際の緯度［南緯16度18分］ときわめて近い。なお、同書簡は、南十字星についての記述とその図解があることでも知られている。)[16]

一方、「カミーニャの書簡」は、日誌形式で書かれ、その内容は、ブラジル先住民との出会いに関する具体的な描写が中心である。そのため、『赤い金―ブラジル先住民の征服、1500-1760―』(1978)を執筆したジョン・ヘミングは、比喩的にではあるが、カミーニャを「ブラジルを訪れた最初の民族学者」とさえ評している。[17]またアルゼンティンの歴史家ルイス・L.・ドミンゲスは1897年、書簡には短時日ではとうてい集められないほどの多くの情報(つまり彼の言葉を借りると、「かの未知の地に居住した後にはじめて知りうる細部」)が含まれているという理由で、カミーニャの書簡は「偽作」であると断定したほどであった。[18]

(2) 書簡の来歴

ペロ・ヴァス・デ・カミーニャの書簡は、マヌエル・アイレス・ド・カザール司祭著『ブラジル地誌』Corografia Brasílica（リオデジャネイロ：王立印刷所、1817年）の注に収録されて、はじめて公刊された。[19]

カザール司祭が利用したのは、リオデジャネイロの王国海軍文書館に所蔵されていたカミーニャの書簡の写本であった。この写本は、アントニオ・バイアンによると、1773年2月19日に、「原本をよりよく理解するために」文書館長ジョゼ・デ・セアブラ・ダ・シルヴァの命令で作成されたものであった。（ちなみに、書簡の原本は、1765年にはすでに、ガヴェタス［Gavetas：トーレ・デ・トンボ文書館の分類項目名］の索引に記載されていた。gav.8, maç.2, n.° 8）この写本が、ナポレオン軍のポルトガル侵攻（1807年）に際して王室がブラジルに避難したとき、王室一行とともにブラジルに渡り、上述のようにリオデジャネイロの王国海軍文書館に保管されることになったのである。[20]

カザール司祭が公刊した「書簡」は、その依拠した写本に誤りがあり（例えば、Calecut［地名カリカット］が Salsetet となっている）、またカザール司祭が羞恥心を傷つけると考えた部分は削除されていた。例えば、次の引用のうち、【　】内が削除された部分である。

> 「男たちにまじってたいへん若くて可愛らしい娘も三、四人いました。髪はまっ黒で長く、背中まで延びていました。【恥部は盛りあがり固く閉じているうえ、恥毛もまったくありませんでした。このためわたくしたちはその恥部をじっと見ても恥しさはなにも感じませんでした。】

彼らの騒ぐ声があまりに大きく、たがいに相手の言うこともわからなければ声も聞きとれないほどでしたから、この時はもはや言葉をかわすこともたがいに意志を伝えることもできませんでした。」[21]

「さきに延べた娘たちのなかに下から上まですでに述べた色で（青みがかった黒い色）身体じゅうを染めている娘が一人いました。【その姿は美しくまたたいへん肉付きもいいうえ、恥部も、と言いましても彼女にとって恥部などという言葉は無縁ですが、たいへん愛くるしいものでしたから、わが国の女性の多くはその姿を見れば、自分たちはその娘に及ばないとして恥じいることでありましょう。】男は一人として割礼を施しておらず、全員がわたくしたちとかわりありませんでした。」[22]

カザール司祭による書簡公刊以後、カミーニャの書簡については数多くの版が刊行されてきた。アナ・マリア・デ・アゼヴェドが掲げる主要な版だけでも25種におよんでいる。[23]

代表的な版としては、次のものがある。

(a)Carlos Malheiro Dias (direcção e coordenação de); *História da Colonização Portuguesa do Brasil, Edição Monumental Comemorativa do Primeiro Centenário da Independência do Brasil*, Porto: Litografia Nacional, 1923, Vol.II, pp.84-99.

(b)*Os Sete Únicos Documentos de 1500, Conservados em Lisboa, Referentes à Viagem de Pedro Álvares Cabral*, Lisboa: Agência Geral das Colónias, 1940, pp.66-102.

(c)Jaime Cortesão, *A Carta de Pêro Vaz de Caminha,* [1943] (Obras Completas 7), Lisboa: Imprensa Nacional - Casa da Moeda, 2000,

pp.95-225.

(d)Joaquim Romero Magalhães e Susana Münch Miranda (apresentação de), *Os primeiros 14 documentos relativos à Armada de Pedro Álvares Cabral*, Lisboa: Comissão Nacional para as Comemorações dos Descobrimentos Portugueses, 1999, pp.95-121.

この中でも特に、ジャイメ・コルテザンの著作［1943年］は、すでに触れたように現在においても最良の研究の一つと考えられている。

(3) カミーニャの人物像

カミーニャは、ポルト市の教養ある中産階級に属していた人物であった。彼は、1500年当時、50歳前後であったと推定されている。父親の仕事の関係で、ポルトで生まれたか、少なくとも幼少のときからポルト育ちであった。1476年に、国王により父の跡を継いでポルト市の貨幣計量官に任命され、1479年から、その地位についた。書簡に見られるように[24]、数字での表現を好むのは、職業上の性癖と考えられる。妻、カタリーナ・ヴァス・デ・カミーニャとともに、市中心部のノヴァ通りに居住していた。貨幣鋳造所もその通りにあった。（ちなみに、現在のエンリケ親王の広場から南に少しドウロ川方向に入った所にある「エンリケ親王の家」［現在は、博物館］の東側一体が当時貨幣鋳造所があった場所にあたる。）娘（イザベル・デ・カミーニャ）がひとりおり、その夫がジョルジェ・デ・オゾロ（オゾリオ)で、教会の不正占拠と暴力行為により、サントメーへの流刑に処せられていた。書簡の最後の部分でカミーニャが国王に対して行った嘆願は、娘婿に関するものであった。[25]

カミーニャは、1500年12月、インドのカリカットにおいて、

ポルトガル商館に対するイスラム教徒の襲撃の際に死亡した。死亡の経緯やその功績が考慮された結果、カミーニャの孫2人は、祖父と同様ポルトの貨幣計量官に任命されている。[26]

カミーニャは1497年、翌年開催される予定のリスボンでのコルテス（身分制議会）に提出するポルト市会の請願書を執筆した。当時、市会の請願書は、市政で重要な地位を占めた人物に依頼されたので、この事実から、カミーニャがポルト市民の信頼を得ていた人物であったことが分かる。[27]

カミーニャは、カリカット商館の書記に就任する予定であったが、ジャイメ・コルテザンらは、彼が同時に旗艦（あるいは艦隊）の書記の役割を兼ねていた可能性が大きいとしている。[28]ただしこれに関しては現在までいかなる史料も発見されておらず、いくつかの状況証拠があるにすぎず、断定はできない。そのような状況証拠の一例を挙げると、4月25日、艦隊がポルトセグロ湾に入り、投錨すると、司令長官は少人数の上陸班を編成した。その上陸班に参加したのは、ニコラウ・コエリョやバルトロメウ・ディアスらそうそうたるメンバーであった。この上陸班にカミーニャは、司令長官カブラルの命令で参加している。ジャイメ・コルテザンは、この事実をカミーニャが「旗艦の書記、報告者」であった証拠と考えている。[29]いずれにしても、カミーニャが、司令長官カブラルやカリカット商館長に就任予定のアイレス・コレイアと同じ旗艦に乗船しており、上陸班に参加するなど報告書簡の執筆に必要な情報を得やすい立場にあったことは間違いない。

カミーニャの「書簡」はすでに述べたように、最初に公刊されたのは19世紀（1817年）になってからであった。そのため、16 世紀のヨーロッパでのブラジル像形成にはきわめて限定的

な影響しか与えなかった。これは、アメリゴ・ヴェスプッチの「新世界」がたちまち公刊され同時代の新世界あるいはブラジル像形成に大きな影響を及ぼしたのとは大きな違いがあったし、16 世紀中葉ブラジルに滞在したイエズス会士の書簡がすぐにヨーロッパで印刷に付され、新世界に関する最新情報として広く流布したのとは、きわめて対照的であった。[30]

第2章　『国王宛て書簡』に見るブラジル像・先住民像

国王宛て書簡で、カミーニャはブラジルおよびブラジル先住民をどのように描写したのか。本章では、書簡の記述をもとに、カミーニャのブラジル像およびブラジル先住民像を探ることにする。

(1) ブラジル像

カミーニャがブラジルで注目したのは、その土地の広大さと繁茂する木々、さらにそこを流れる水量豊かな河川であり、またその快適な気候であった。

カミーニャは、こう記している。

> 「陸は全域にわたって平坦で大きな木が繁っております。(中略)見わたす限りわたくしたちの眼に入るものは陸地と木だけだったからです。」[31]

> 「ここに生えている木は数もたいへん多く背も高いうえ、種類もきわめて多いことから考えますと、内陸部のほうには間違いなくたくさんの鳥がいるものと思われます。」[32]

「わたくしたちはそのあたりを歩いて川の様子を見てまわりました。水量が多くたいへんきれいな水の流れている川であります。」[33]

「この地は気候がたいへんよく［注：ポルトガル最北部地方と］ひとしく涼しくて快適であります。」[34]

カミーニャは、このように、ブラジルの豊かな自然を強調した。アナ・マリア・アゼヴェドは、カミーニャのブラジル像に関して、カミーニャがブラジルを美しい「エデンの園」のイメージでとらえ、「地上の楽園」として描写したと述べている。[35] ポルトセグロ（南緯16度18分）に到達したのが、南半球では秋にあたる4月下旬だとはいえ、同地の気候が、ポルトガル北部地方とひとしく「涼しく、快適である」と述べ、気候のよさを強調しているのは注目に値する。

このようなブラジル像には、セルジオ・ブアルケ・デ・オランダも指摘するように、中世以来エデンの園の描写に見られる「暑くもなく寒くもない」という「常春」のイメージが投影しているように思われる。これは、16世紀にブラジルを訪れた他のポルトガル人にも共通のものであり、現代の日本人がブラジルというと「灼熱の熱帯」をイメージするのとはかなり異なっている。[36]

カミーニャの時代、ブラジル大西洋岸には現在よりも広範囲に森林が広がり、それにより現在よりもずっと河川が多く、水が豊富であった。そしてその森には、鳥や野生の動物が生息していた。特にポルトガル人の注目を集めたのは、鳥、とくに色とりどりの羽根をもつオオムの類であった。

「わたくしたちが森で薪を切っていると鸚鵡が数羽木のあいだをぬって飛んで行きました。緑のものもいればくすんだ色のものもおり、大きさも大小さまざまでした。したがって、この地には鸚鵡がたくさんいるものと思います。」[37]

鳥が飛び交う緑の森、豊かな水、快適な気候は、まさに地上のどこかにあると想起されていた「地上の楽園」の欠くことのできない要素であった。

(2) ブラジル先住民

4月22日ブラジルの陸地を望見したカブラル一行は、前述のように、翌23日に浜辺にいるブラジル先住民をはじめて目撃した。

「どの男も肌はくすんだ小麦色で全裸のうえ、恥部を覆うようなものもまったく身につけていませんでした。」[38]

さらに、翌24日には、ポルトガル人は、小舟に乗っていた先住民の若者を2人捕らえて旗艦に連行したが、その2人のことを次のように記している。

「彼らの肌はくすんだ小麦色で、すこし赤味がかっており顔と鼻はともによく整っています。全裸で身体を覆うものはなにもなく、恥部をなにかで隠すべきかそのままにしておくべきかなどということはおよそ考慮の外にあります。その態度は純朴そのもので、顔が人の眼に触れることをまったく問題にしていないのと同様であります。」[39]

カミーニャがまず強い印象をもったのは、このように先住民の「全裸」であった。[40]ヨーロッパ人にとって肉体は「罪」の源であり、隠すべきものという観念があった[41]が、ブラジル先住民は「全裸」であることにまったく無頓着であり、そのことを恥ずかしがる様子はまったくなかった。ジャイメ・コルテザンによると、カミーニャは比較の観点から先住民を観察したが、その際比較の対象となったのは、ヨーロッパ人というよりはむしろアフリカの黒人であった。[42]その結果、マリア・パウラ・カエターノによると、「着衣の」ヨーロッパ人、「恥部を覆う」アフリカ黒人、「全裸の」ブラジル先住民という認識がカミーニャに生まれたのだという。[43]

聖書に登場する「アダムとイブ」は、禁断の木の実を口してから、自分が裸体であることに気づき、少なくとも恥部を隠した。ところが、ブラジル先住民には恥部を隠すという意識は一切なかった。その事実から、彼らが「原罪」以前の状態にいるのではないか、つまり「エデンの園の住民ではないか」という考えがカミーニャの頭に浮かんだというのである。[44]

以上のように、カミーニャは先住民が「全裸」であることを繰り返し述べているが、「全裸」は先住民の「野蛮さ」を表すものではなく、むしろ彼らが汚れのない「純真無垢」な自然状態にいることを表すものであった。そしてそれは、「地上の楽園」、「エデンの園」に欠くことのできない「純真無垢」な「アダムとイブ」に通じるものであった。[45]

さらに、インドへ向けての出発を控えた4月30日、5月1日になると、カミーニャは先住民の「純真さ」をいっそう強調し、彼らはたいへん「純真」であるので、先住民をキリスト教へ改宗させるのはきわめて容易であるという考えを繰り返し記すよ

うになった。[46]

「わたくしの見たところでは、彼らはたいへん純真な人びとであります。ですから、もしわたくしたちに彼らの言葉がわかり、彼らもわたくしたちの言葉を理解することができさえすれば、彼らはたちどころにキリスト教徒となりましょう。彼らの様子から見て、彼らにはいかなる信仰もなく、また信仰について考えていないようだからです。...」[47]

「誰もが彼らには偶像もなければその他の崇拝物もないと考えました。」[48]

「陛下よ、ここの人たちはかくのごとくまことに純朴であります。恥じらうことのない純真無垢なる心の点ではアダン［アダム］も彼らには及ばないことでありましょう。このように純粋な心を持って生きている人びとが己の魂の救済にかかわることを教えられたとき、［キリスト教に］帰依しないものかどうかその答えは陛下の御賢察におまかせいたします。」[49]

このように、カミーニャは、先住民を一種の野生人、つまり自然の法の掟にしたがって暮らす人々ととらえ、アダムのような「純朴な」存在とみなした。[50]

しかしここで問題となるのは、このようなカミーニャの先住民像は、モンテーニュやルソーに見られる「高貴なる野蛮人」の先駆けとみなすことができるのだろうか、という点である。

モンテーニュは、『エセー』[51]の中で、ブラジル先住民の戦争捕虜が示す高潔な態度を高く評価し、食人者と考えられていた「新世界の土人たちのほうが、より人間本来の性質、行動、思

考を維持していると見、彼らを『よい野蛮人』と考えることによって、自分の立つ世界の非人間的な面を強く論難」[52]した。その意味で、『エセー』のこの項目、つまり「人食い人種について」は、「技芸、文明の発達しない世界に生きている野蛮人たちに自然本来の人間性が保たれているという、『よい野蛮人』bon sauvage の擁護論」であるとともに、「ヨーロッパ社会への痛烈な諷刺となっている」[53]。

それでは、カミーニャの場合はどうだろうか？この点に関して、J・S・ダ・シルヴァ・ディアスは、16 世紀のポルトガル人著述家の中には、「高貴なる野蛮人」の観念の先駆けとみなすべき人物はいなかったと断言している。つまり、ブラジル先住民を「悪しき野蛮人＝人喰い」として描写した 16 世紀のポルトガル人記録者一般はいうにおよばず、先住民の「純朴さ」を強調したカミーニャさえも、「高貴なる野蛮人」の観念の先駆けとはみなせないと述べている。[54]

その理由として、彼は、カミーニャには、「未開人の自然の善良さ」という概念はあったが、ヨーロッパ文化に対する批判精神はなかったという点を挙げている。確かに、カミーニャの先住民像は、ある意味で「牧歌的」とも形容できるが、彼の書簡には、「高貴なる野蛮人」を考える上で不可欠の要素であるヨーロッパ社会への痛烈な「批判」ないしは「諷刺」を見出すことはできない。[55]

その意味では、カミーニャは、あくまでも、実証的かつ科学的な精神の持ち主として、未知の存在であった先住民を「好意的に、また尊敬の念をもって」、客観的かつ正確に描写しようとした実務家であった。[56]

おわりに

最後に、以上述べてきたことを要約的に概観し、本稿のまと

めとしたい。

カミーニャの『国王宛て書簡』は、カブラル艦隊に参加したペロ・ヴァス・デ・カミーニャが1500年5月1日付けでブラジルのポルトセグロから国王マヌエル一世に送ったブラジル「発見」を報告する書簡である。

カミーニャは、ポルト市の中産階級に属し、貴族ではなかったが、国王によって父の後継者としてポルト市の貨幣計量官という要職に任命された人物であった。また1497年には、リスボンのコルテス（身分制議会）に対する請願書を執筆するなど、市政においての重要な役割を果たした。

カミーニャは、インドのカリカットに設置予定の商館で書記として勤務することになっていたが、上述のように、彼が旗艦（あるいは艦隊）の書記の役割を兼務していたと考える歴史家も多い。艦隊では、司令長官カブラルの旗艦に乗船しており、多くの情報を収集しやすい立場にあった。すでに触れた点であるが、司令長官の命令でニコラウ・コエリョやバルトロメウ・ディアスとともに最初の上陸班に加わったという事実は、カミーニャが旗艦（あるいは艦隊）の書記を兼ねていたかどうかを考える上で重要である。

『国王宛て書簡』は、4月24日に書き始められ、ほぼ日誌形式で記されている。その内容は、ブラジルの自然と先住民の描写が中心であり、あいまいな表現を避け、数字を多用するなど客観的かつ正確に真実だけを語ろうという姿勢がその特徴となっている。

書簡では、ブラジルの豊かな自然や穏やかな気候が強調され、その描写は「地上の楽園」、「エデンの園」を彷彿とさせる。先住民が男女とも全裸であることが繰り返し記述されているが、「全裸」は先住民の「野蛮さ」を表すものではなく、「純

真無垢」であることの象徴となっている。この点は、先住民を「野蛮」な存在とみなしたカミーニャ以降の16世紀ポルトガル人記録者とは、大きく異なっている。この事実はきわめて重要である。

ただし、カミーニャが先住民をいわば「よき野蛮人」と描いているからといって、彼を例えばモンテーニュなどに見られる「高貴なる野蛮人」の観念の先駆者と考えるのはやはり問題がある。前述のように、カミーニャの書簡には、「高貴なる野蛮人」の観念に不可欠なヨーロッパ文明への批判精神や痛烈な諷刺は見て取ることができないからである。ただし「高貴なる野蛮人」の観念の先駆者とみなすことができないとしても、それによって、カミーニャの書簡の価値が損なわれるものではない。カミーニャの書簡の価値は、「そのいきいきとした描写」と「当時のポルトガルの知識人がもつ実証的な感覚と科学的な観察力」にあった。[57]そしてジャイメ・コルテザンも言うように、そのような感覚や観察力によって、カミーニャはブラジルの先住民を「新世界」の住民であると認識した最初の人物になったのである。[58]

［注］

[1] ガマの艦隊は1497年8月22日、大西洋を大きく西に迂回したとき、陸の存在を暗示するいくつかの兆候を見つけている。たとえば、航海記の次の一節を参照。「サギに似た鳥をたくさん見つけた。これらの鳥は、夜が来ると、陸地に向かうのか南西に向かって勢いよく飛び立った。...」(野々山ミナコ訳「ドン・ヴァスコ・ダ・ガマのインド航海記」［『コロンブス、アメリゴ、ガマ、バルボア、マゼラン　航海の記録』〈大航海時代叢書第1巻〉、岩波書店、1965年］p.347、一部改変)。また、生田滋著『ヴァスコ・ダ・ガマ—東洋の扉を開く—』(大航海者の世界II)、原書房、1992、p.54も参照。

[2] Joaquim Romero Magalhães e Susana Münch Miranda (apresentação de), *Os primeiros 14 documentos relativos à Armada de Pedro Álvares Cabral*, Lisboa: Comissão Nacional para as Comemorações dos Descobrimentos Portugueses, 1999, p.10.

Max Justo Guedes, *O Descobrimento do Brasil [1500-1548]*, The Discovery of Brazil, Lisboa, CTT Correios, 2000, p.19.

[3] カミーニャ著、池上岑夫訳「国王宛書簡」［『ブーチエ、カミーニャ、マガリャンイス、ピガフェッタ　ヨーロッパと大西洋』〈大航海時代叢書第II期第1巻〉、岩波書店、1984年］, pp.188-189。［以下、「書簡」邦訳と略記する。］

[4] 「書簡」邦訳、p.189。

[5] そこにはトゥピニキン族、つまりトゥピ・グアラニー語族のうちトゥピ語に属する先住民集団が居住していた。彼らは、焼き畑による根菜栽培や狩猟・漁労を主たる生業とし、半定住の生活をしていた。

[6] 航海の概要については、例えば、ジョルジェ・コウト、マックス・ジュスト・ゲデス著、東明彦監訳『大航海時代におけるブラジル「発見」』大阪外国語大学メディア・リテラシー研究会(編集・発行)、2000年、pp.13-19参照。

[7] 書簡の紙数は、二つ折り版(fólio)換算で14枚、表裏で28頁ある。テキストが記入されているのは、27頁で、最後の1頁には文書名が記入されて

いる。

字体は、letra cursiva processal と呼ばれる、当時の書記が使用する標準的な字体である。1 頁は、31 行-39 行からなり、平均 36 行である。字体から見て、文章を書き慣れている人物であると推測される。Jaime Cortesão, *A Carta de Pêro Vaz de Caminha*, (Obras Completas 7), Lisboa: Imprensa Nacional - Casa da Moeda, 2000, [Reimpressão da edição de 1994. Edição patrocinada pela Comissão Nacional para as Comemorações dos Descobrimentos Portugueses.], pp.85-86

書簡は、1500 年 4 月 24 日に書き始められ、4 月 29 日を除き、5 月 1 日まで毎日書き継がれた。4 月 25 日、26 日、27 日、28 日は、各頁の一番上から書き始められている。*Ibid.*, pp.62-63.

8 *Ibid.*, p.80.

9 José Honório Rodrigues, *História da História do Brasil, 1ª.Parte, Historiografia Colonial*, 2ª.edição, São Paulo, Companhia Editora Nacional, 1979, (Brasiliana: Grande formato; v.21), p.1.

10 José Honório Rodrigues, *Historiografía del Brasil Siglo XVI*, México, Instituto Panamericano de Geografía e Historia, 1957, p.11.

11 Cortesão, *A Carta de Pêro Vaz de Caminha*, (Obras Completas 7), Lisboa: Imprensa Nacional - Casa da Moeda, 2000.

12 Cortesão, *A Carta de Pêro Vaz de Caminha*, p.9.

13 Magalhães *et al.*, Os primeiros 14 documentos ...

14 その他、カブラル艦隊の航海については、『氏名不詳の水先案内人の報告』と呼ばれる記録がある。ただし、原本は失われ、イタリア語訳が現存しているのみである。邦訳、池上岑夫訳「カミーニャ　国王宛書簡」pp.555-557 参照。なお、Carlos Malheiro Dias (direcção e coordenação de); *História da Colonização Portuguesa do Brasil, Edição Monumental Comemorativa do Primeiro Centenário da Independência do Brasil*, Porto: Litografia Nacional, 1923, Vol.II, pp.106-117 には、Montalboddo の *Paesi nuovamente retrovati* (1507) に所収の当該部分のファクシミルとその部分のイタリア語からポルトガル語への再訳が収録されている。

[15] メストレ・ジョアンは、*Os Sete Únicos Documentos de 1500, Conservados em Lisboa, Referentes à Viagem de Pedro Álvares Cabral*, Lisboa: Agência Geral das Colónias, 1940, pp.105-106 で、論証されているように、スペイン人である。その意味では、メストレ・フアンと表記したほうがいいのかもしれない。ただし、ポルトガル語混じりのスペイン語で書かれた書簡の原文で自分のことを o mestre Joham と記しているので、ここではポルトガル語風にメストレ・ジョアンと表記する。

[16] Magalhães *et al.*, *Os primeiros 14 documentos* ..., pp.91-93.

[17] John Hemming, *Red Gold, The Conquest of the Brazilian Indians, 1500-1760*, Cambridge: Harvard University Press, 1978, p.2.

[18] Capistrano de Abreu, "Vaz de Caminha e sua carta", in Capistrano de Abreu, *O Descobrimento do Brasil, São Paulo*: Martins Fontes, 1999, (Estudo crítico publicado no Livro de Ouro comemorativo do Centenário da Independência Brasileira (Anuário do Brasil), como reprodução revista pelo autor do que se acha inserto na Revista do Instituto Histórico e Geográfico Brasileiro, tomo 71, parte 2ª, 1908.) p.189.、および Cortesão, *A Carta de Pêro Vaz de Caminha*, p.29.、Rodrigues, *Historiografia del Brasil*..., pp.11-12.参照。
アブレウは、書簡の書体も紙も当時のものであり、先住民についての鋭い観察も当時のポルトガル人の観察眼からしてなんら不思議なことではないと、ドミンゲスの主張を一蹴している。

[19] P.e Aires de Casal, *Corografia Brasílica ou Relação histórico-geográfica do Reino do Brasil*, (1817), Belo Horizonte, Ed. Itatiana; São Paulo, Ed. da Universidade de São Paulo, 1976 (Reconquista do Brasil, v. 27) , pp.21-27.

[20] *Os Sete Únicos Documentos de 1500*, pp.63-65.

[21] (「書簡」邦訳、pp.199-200)
De Casal, *Corografia Brasílica*, p.23.

[22] (「書簡」邦訳、pp.200-201)
De Casal, *Corografia Brasílica*, p.23.

[23] *Carta de Pêro Vaz de Caminha a El-Rei D. Manuel sobre o Achamento do Brasil*, (Estudo crítico e notas de Ana Maria de Azevedo e de Maria Paula

Caetano e Neves Águas), Mem Martins: Publicações Europa-América, 2000, pp.119-122.

書簡については、各種のファクシミル版、翻刻版、現代ポルトガル訳のほか、多くの外国語訳も刊行されている。重要なものについては、Cortesão, *A Carta de Pêro Vaz de Caminha...*, pp.27-31 を参照。

なお、Joaquim Veríssimo Serrão, Manuela Mendonça, Margarida Garcez Ventura, *A Carta de Pêro Vaz de Caminha*, Ericeira: Mar de Letras, 2000, (pp.125-152)所収のファクシミル版は原寸大の鮮明なカラー印刷で、その画質は、トーレ・デ・トンボ文書館で入手できるマイクロフィルムと遜色ない。

日本語訳には、(1)池上岑夫訳「カミーニャ　国王宛書簡」[『ブーチエ、カミーニャ、マガリャンイス、ピガフェッタ　ヨーロッパと大西洋』〈大航海時代叢書第 II 期第 1 巻〉、岩波書店、1984 年]、(2)日埜博司「15 世紀後期のポルトガル語の諸相—ペロ・ヴァス・デ・カミーニャの「書翰」を例として— [後編]」、『Cosmica -Area Studies-』XIV、1985 年、京都外国語大学、pp.114-133 がある。

24　次にいくつかの例を上げる。4 月 23 日、陸へ接近しているときの様子は、「そこに至るまでの深さは一七、一六、一五、一四、一三、一二、一〇、九ブラサ（注：1 ブラサは約 2.2 メートル）とかわりました。」と表現している。また先住民の数を表記するときは、「七、八人」、「一八人ないし二〇人」、「六〇人ないし七〇人」というように数字で具体的に記している。4 月 24 日先住民を 2 名連行したときは、「一人は一張りの弓と六、七本の矢を持っていました。」と記している。（「書簡」邦訳、p.190、p.192.）

25　Cortesão, *A Carta de Pêro Vaz de Caminha...*, pp.36-37.

26　*Ibid.*, p.37.

27　*Ibid.*, p.39.

28　*Ibid.*, p.49.

29　*Ibid.*, p.50.

30　アメリゴ・ヴェスプッチ著、長南実訳、増田義郎注、「アメリゴ・ヴェスプッチの書簡集」[大航海時代叢書 1『コロンブス、アメリゴ、ガマ、

バルボア、マゼラン　航海の記録』所収]、岩波書店、1965, pp.251-252 参照。

ラス・カサスは、1552 年から 1563 年にかけて編纂された『インディアス史』[ラス・カサス著、長南実訳、増田義郎注、『インディアス史　三』[大航海時代叢書　第Ⅱ期　23]、1987、岩波書店] 第 1 巻第 174 章で、新大陸で布教活動を行うポルトガル人イエズス会士の書簡を引用し紹介している。これらの書簡は、ラス・カサスは明記していないが、1549 年から 1551 年に執筆されたもので、1551 年にはスペイン語版が、その翌年にはイタリア語版が公刊され、広く流布した。つまり、イエズス会士の書簡は、同時代人のブラジル像、ブラジル人像形成に大きな影響をおよぼした。詳細については、以下の文献を参照。

Serafim Leite S.I., *Monumenta Brasiliae I [1538-1553]*, Roma: "MONUMENTA HISTORICA SOCIETATIS IESU", 1956, pp.145-154, pp.200-210, pp.250-264, pp.266-271, pp.276-283.

31　「書簡」邦訳、p.224.

32　「書簡」邦訳、p.214.

33　「書簡」邦訳、p.208.

34　「書簡」邦訳、p.224.

35　Ana Maria de Azevedo, "<<O Significado>> da <<Carta de Pêro Vaz de Caminha a El-Rei D. Manuel Sobre o Achamento do Brasil>>" in *Carta de Pêro Vaz de Caminha a El-Rei D. Manuel sobre o Achamento do Brasil*, Mem Martins: Publicações Europa-América, 2000, pp.13-14.

36　Sérgio Buarque de Hollanda, *Visão do Paraíso: os motivos edênicos no descobrimento e colonização do Brasil*. 3ª. ed., São Paulo: Ed. Nacional, Secretaria da Cultura, Ciência e Tecnologia, 1977, (Brasiliana, v.333), XX-XXV.

拙稿「16 世紀ブラジルの先住民と奴隷制」、科研報告書『「グローバル・ヒストリー」の構築と歴史記述の射程』(大阪外国語大学、2000 年) 所収、pp.99-100 参照。

37　「書簡」邦訳、p.214

当初、ブラジルは、カブラルが命名した「真の十字架の地」や国王が命

名した「聖なる十字架の地」ではなく、また後にブラジル木にちなみ命名された「ブラジル」でもなく、「パパガヨの地」つまり「オオムの地」と呼ばれていた。

38 「書簡」邦訳、p.190.

39 「書簡」邦訳、p.193

カミーニャは 4 月 24 日に書簡の執筆を開始した。その日、彼は 3 月 9 日ポルトガルのベレン［リスボン西部］の港を出発し、ブラジルへ到達するまでの航海の様子とブラジル「発見」の経緯を一気に書簡に記した。おそらく記述するべき話題は十分にあったと考えられる。ところが、4 月 24 日に書かれた文章の半分は、カブラルの旗艦に連行されてきた先住民 2 人に関する記録だったのである。この先住民 2 人についての描写は、実に克明である。

なお、2 人の先住民は、パンとワインを含む、与えられた食べ物を拒絶している。（「書簡」邦訳、pp.194-195.） パンとワインは、キリスト教の文化コードでは宗教と密接に結びついているので、それらを拒絶することは、ヨーロッパ人から見れば先住民の「非宗教性」を示すものであったという指摘がある。Maria Paula Caetano e Neves Águas, "Estudo Introdutório" in *Carta de Pêro Vaz de Caminha a El-Rei D. Manuel sobre o Achamento do Brasil*, (Estudo crítico e notas de Ana Maria de Azevedo e de Maria Paula Caetano e Neves Águas), Mem Martins: Publicações Europa-América, 2000, pp.57-58.

40 António Pedro Pires, *Vida e Morte nas Terras do Pau-Brasil e do Acúçar, Ensaio antropológico sobre a Carta de Pero Vaz de Caminha*, Lisboa, A Regra do Jogo, Edições, Lda., (Textos de Antropologia-2), 1980, p.14.

ピレスによると、裸体は塩分の喪失を避けるために必要だった。（ちなみに、身体への彩色は日射病を避けることが目的の一つであった。）*Ibid.*, p.51.

41 De Azevedo, <O Significado>..., pp.17-18.

42 Cortesão, *A Carta de Pêro Vaz de Caminha...*, p.75.

「鼻は（...）よく整っています。」あるいは、「彼らの髪はなめらかであります。」（「書簡」邦訳、p.193）という表現には、アフリカ人との比較の観点が読み取れる。

[43] Caetano, "Estudo Introdutório", p.62.

[44] *Ibid.*, p.64.

[45] 拙稿「16 世紀ブラジルの先住民と奴隷制」、pp.101-106 を参照。
楽園の住民を思い起こさせる「純真無垢」という先住民像は、16 世紀のポルトガル人記録者の中でカミーニャに特徴的なものであった。なぜなら、すでに別稿で論じたように、16 世紀中葉以降、ブラジルの「植民地」化が進行すると、カミーニャのような先住民像は見られなくなり、「先住民＝野蛮な人喰い」というイメージが支配的になったからである。

[46] カミーニャは、ブラジル先住民男性が「割礼」を施していないと 2 度述べている。(「書簡」邦訳、p.195, p.201.)「割礼」を施していない、つまり先住民がイスラム化されていないという事実は、改宗が容易であると考える大きな理由となった。この場合も、イスラム化されたアフリカ人の事例との比較の観点がある。Cortesão, *A Carta de Pêro Vaz de Caminha...*, p.75.

[47] 「書簡」邦訳、pp.217-218.

[48] 「書簡」邦訳、p.222.

[49] 「書簡」邦訳、pp.222-223.

[50] ただし、カミーニャが、ヨーロッパその他の文明社会には存在するいくつもの要素が先住民社会には欠けていると繰り返し述べている点には注意を要する。それは、16 世紀のポルトガル人記録者の記述に頻繁に現れる先住民社会には、Fé（信仰）、Lei（法律）、Rei（王）が欠けているという記述と軌を一にしている。
例えば、一見、先住民の長と思われる人物に対して、他の者が「敬意」なり、「怖れ」なりを抱いていないありさまを見て、カミーニャは Rei「王」の不在を感じた。(「書簡」邦訳、p.203）また、先住民が司令長官（カブラル）へ最高指揮官（セニョール）に対する礼をつくさないことは、Lei（法律）［この場合は、社会の秩序］の欠如だと考えている。(「書簡」邦訳、pp.206-207)
また、カミーニャが先住民を限りなく「野生動物」に近い存在であるとみなしていることにも注意を要する。

「森に棲む鳥や動物は大気の恵みで、人間に飼育されている動物より羽根や毛が美しくなりますが、彼らはそうした動物に似ているという思いが強くいたします。このように言いますのは、彼らの身体がこのうえもなく清潔で美しくまた肉付きもよいからです。」(「書簡」邦訳、p.210)

[51] モンテーニュ著、荒木昭太郎訳、『エセー』、[世界の名著 19]、中央公論社、1967.「第 I 巻第 31 章 人食い人種について」[1578 年－80 年に書かれたと推定]、pp.176-180。

[52] *Ibid.*, p.24.

[53] *Ibid.*, p.164.

[54] J.S. da Silva Dias, "Los portugueses y el mito del 'buen salvaje'", in *Influencia de los descubrimientos en la vida cultural del siglo XVI* (Traducción de Jorge Rueda de la Serna) México, Fundo de Cultura Económica, 1986, p.219.

[55] *Loc.cit.*.

[56] 佐野泰彦『ポルトガル・ブラジル文化への誘い』、同朋舎、1983 年、p.218。

[57] 佐野、前掲書、p.218.

[58] Cortesão, *A Carta de Pêro Vaz de Caminha...*, p.79.

［参考文献］

アメリゴ・ヴェスプッチ著、長南実訳、増田義郎注、「アメリゴ・ヴェスプッチの書簡集」［『コロンブス、アメリゴ、ガマ、バルボア、マゼラン　航海の記録』〈大航海時代叢書第1巻〉、pp.249-338、岩波書店、1965］。

東明彦「16世紀ブラジルの先住民と奴隷制」、科研報告書『「グローバル・ヒストリー」の構築と歴史記述の射程』（大阪外国語大学、2000年）所収, pp.99-108。

生田滋著『ヴァスコ・ダ・ガマ—東洋の扉を開く—』（大航海者の世界II）、原書房、1992。

ガマ（ヴァスコ・ダ・）著、野々山ミナコ訳「ドン・ヴァスコ・ダ・ガマのインド航海記」［『コロンブス、アメリゴ、ガマ、バルボア、マゼラン　航海の記録』〈大航海時代叢書第1巻〉、pp.339-430、岩波書店、1965年］。

カミーニャ著、池上岑夫訳「国王宛書簡」［『ブーチエ、カミーニャ、マガリャンイス、ピガフェッタ　ヨーロッパと大西洋』〈大航海時代叢書第II期第1巻〉、pp.178-225、岩波書店、1984年］。

佐野泰彦『ポルトガル・ブラジル文化への誘い』、同朋舎、1983年。

ジョルジェ・コウト、マックス・ジュスト・ゲデス著、東明彦監訳『大航海時代におけるブラジル「発見」』大阪外国語大学メディア・リテラシー研究会（編集・発行）、2000年。

日埜博司「15世紀後期のポルトガル語の諸相—ペロ・ヴァス・デ・カミーニャの「書翰」を例として—［後編］」、『Cosmica -Area Studies-』XIV、1985年、京都外国語大学、pp.114-133。

モンテーニュ著、荒木昭太郎訳、『エセー』、［世界の名著　19］、中央公論社、1967.「第I巻第31章　人食い人種について」pp.164-182。

ラス・カサス著、長南実訳、増田義郎注、『インディアス史　三』〈大航海時代叢書第II期第23巻〉、1987、岩波書店。

Abreu, Capistrano de: "Vaz de Caminha e sua carta", in Capistrano de Abreu, *O Descobrimento do Brasil*, São Paulo: Martins Fontes, 1999, pp.179-191, (Estudo crítico publicado no Livro de Ouro comemorativo do Centenário da Independência Brasileira (Anuário do Brasil), como reprodução revista pelo autor do que se acha inserto na Revista do Instituto Histórico e Geográfico Brasileiro, tomo 71, parte 2ª, 1908).

Azevedo, Ana Maria de: "<<O Significado>> da <<Carta de Pêro Vaz de Caminha a El-Rei D. Manuel Sobre o Achamento do Brasil>>" in *Carta de Pêro Vaz de Caminha a El-Rei D. Manuel sobre o Achamento do Brasil*, Mem Martins: Publicações Europa-América, 2000, pp.13-14.

Caetano, Maria Paula; Águas, Neves: "Estudo Introdutório" in *Carta de Pêro Vaz de Caminha a El-Rei D. Manuel sobre o Achamento do Brasil*, (Estudo crítico e notas de Ana Maria de Azevedo e de Maria Paula Caetano e Neves Águas), Mem Martins: Publicações Europa-América, 2000, pp.25-68.

Casal, P.e Aires de: *Corografia Brasílica ou Relação histórico-geográfica do Reino do Brasil*, (1817), Belo Horizonte, Ed. Itatiana; São Paulo, Ed. da Universidade de São Paulo, 1976 (Reconquista do Brasil, v. 27) .

Cortesão, Jaime: *A Carta de Pêro Vaz de Caminha*, (Obras Completas 7), Lisboa: Imprensa Nacional - Casa da Moeda, 2000, [Reimpressão da edição de 1994. Edição patrocinada pela Comissão Nacional para as Comemorações dos Descobrimentos Portugueses].

Dias, Carlos Malheiro (direcção e coordenação de); *História da Colonização Portuguesa do Brasil*, Edição Monumental Comemorativa do Primeiro Centenário da Independência do Brasil, Porto: Litografia Nacional, 1923, Vol.II.

Dias, J.S. da Silva: "Los portugueses y el mito del 'buen salvaje'", in *Influencia de los descubrimientos en la vida cultural del siglo XVI* (Traducción de Jorge Rueda de la Serna) México, Fundo de Cultura Económica, 1986, pp.210-255.

Guedes, Max Justo: *O Descobrimento do Brasil [1500-1548]*, The Discovery of Brazil, Lisboa, CTT Correios, 2000.

Hemming, John: *Red Gold, The Conquest of the Brazilian Indians, 1500-1760*, Cambridge: Harvard University Press, 1978.

Hollanda, Sérgio *Buarque de: Visão do Paraíso: os motivos edênicos no descobrimento e colonização do Brasil.* 3ª. ed., São Paulo: Ed. Nacional, Secretaria da Cultura, Ciência e Tecnologia, 1977.

Leite, Serafim S.I.: *Monumenta Brasiliae I [1538-1553]*, Roma: "MONUMENTA HISTORICA SOCIETATIS IESU", 1956, pp.145-154, pp.200-210, pp.250-264, pp.266-271, pp.276-283.

Magalhães, Joaquim Romero; Miranda, Susana Münch (apresentação de): *Os primeiros 14 documentos relativos à Armada de Pedro Álvares Cabral*, Lisboa: Comissão Nacional para as Comemorações dos Descobrimentos Portugueses, 1999

Os Sete Únicos Documentos de 1500, Conservados em Lisboa, Referentes à Viagem de Pedro Álvares Cabral, Lisboa: Agência Geral das Colónias, 1940.

Pires, António Pedro: *Vida e Morte nas Terras do Pau-Brasil e do Acúçar, Ensaio antropológico sobre a Carta de Pero Vaz de Caminha*, Lisboa, A Regra do Jogo, Edições, Lda., (Textos de Antropologia-2), 1980.

Rodrigues, José Honório: *Historiografía del Brasil Siglo XVI*, México, Instituto Panamericano de Geografía e Historia, 1957.

Rodrigues, José Honório: *História da História do Brasil, 1ª.Parte, Historiografia Colonial*, 2ª.edição, São Paulo, Companhia Editora Nacional, 1979, (Brasiliana: Grande formato; v.21).

Serrão, Joaquim Veríssimo; Mendonça, Manuela; Ventura, Margarida Garcez: *A Carta de Pêro Vaz de Caminha*, Ericeira: Mar de Letras, 2000.